群馬県前橋市

前田II遺跡

エヌ・ティ・ティ中央移動通信群馬支店社屋 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1 9 9 1

前橋市埋蔵文化財発掘調查団



前橋市は北に赤城山、西に榛名山を望む関東平野の北部を市域とした県都であります。北から南へ貫流する利根川の清流は「水と緑と詩の町」を潤し、かつては「糸の町」として養蚕製糸で栄えてきました。今人口28万余を擁し生涯教育都市を目指し、教育文化・商工業の調和のある「豊かで、すばらしい社会を築く、街づくり」を進めています。

前田 I 遺跡の所在する東善町は中心市街地から南東約8Kmに位置し、南部の町界は伊勢崎市、佐波郡玉村町に隣接し、一級河川韮川右岸に沿った前橋台地の南端にあり、高崎市、勢多郡大胡町、更に玉村町を経て多野郡新町、藤岡市へと道路交通に至便の地であります。

周辺は金冠塚古墳や国指定史跡の八幡山古墳など古代の遺跡が点在し、中世の古文書に残る善養寺荘の荘名があり、江戸期慶安年間に山王村・中内村・駒形新田(駒形町)を分村した。等々昔を今に伝える地域であります。

この調査は民間開発行為により、エヌ・ティ・ティ中央移動通信株式会社社屋建設にさきがけての埋蔵文化財発掘調査を実施したものであります。調査では平安期の住居址14軒・ピット45ケ所・土坑1基を確認した他、多数の土師器・須恵器などの遺物を検出し、記録保存いたしました。

この調査報告書を刊行するにあたり、多くの方々の御理解と御協力を得たことに対し厚く御礼申し上げます。

平 成 3 年 11月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団団 長 遠 藤 次 也

例 言

- 1 本書は、都市計画法第29条の開発行為(宅地造成事業実施)の許可に先がけた開発予定地の埋蔵文 化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、立合者 前橋市埋蔵文化財発掘調査団(団長 遠 藤 次 也)の立ち合いのもと、 委託者 エヌ・ティ・ティ中央移動通信株式会社の委託を受け、スナガ環境測設株式会社(前橋市 青柳町211-1代表取締役 須永眞弘)が実施した。
- 3 調査担当者 新保一美(前橋市埋蔵文化財発掘調査団 発掘調査係員) 荻野博巳(スナガ環境測設株式会社 調査員)
- 4 遺跡名 前田 I 遺跡 略称3G-7
- 5 所 在 地 前橋市東善町 123 1 番地
- 6 調査期間 発掘 平成3年7月10日~平成3年8月20日 整理 平成3年8月20日~平成3年11月30日
- 7 調查面積 400m²
- 8 出土遺物は、前橋市教育委員会に保管する。
- 9 本書は調査団の指導のもとに、スナガ環境測設株式会社埋蔵文化財調査部(専務取締役兼部長 金子正人)が作成に当り、編集を須永眞弘、校正を金子正人、執筆を荻野博巳、測量図書の整理校正を勝田貞幸(調査助役)、遺物の復元・実測・計測を石島正二・佐々木智恵子・角田朱美・大島由利、遺構トレースを小林裕美、写真製版を鈴木赳夫、内業事務を須永豊が担当した。
- 10 測量・調査計画を須永眞弘 (測量士 第 52614号) が行い、調査の指揮指導を荻野博巳、遺構遺物写 真撮影を荻野博巳・勝田貞幸が当った。測量と測量指導は板垣宏 (測量課長)・勝田貞幸・樺沢高幸 (測量主任)・佐々木智恵子・角田朱美・大島由利が当った。発掘調査の安全管理は勝田貞幸が行っ た。作業事務を柴崎信江が担当した。
- 11 調査に協力を戴きましたエヌ・ティ・ティ中央移動通信株式会社を始め、地元の方々及び調査並び に整理に際して指導、助言を賜った各方面の方々に深甚なる感謝を申し上げます。
- 12 調査に参加した方々(順不同)

内山恵美子 中川類子 小野沢はつ江 深沢千代 山崎勘治

凡 例

1 遺構名・略称

遺構名と略称は次の通りとした。

土師器住居址 - H ピット - P 土坑 - D 竈 - カ 遺物名・略称

土 器 - P 石 - S (断面図に使用)

2 実測図の縮尺 住居址 S = 1/60 竈S=1/30 全体図S=1/200 土 坑S=1/60 遺物実測図S=1/1·1/2·1/3 ピットS=1/60 1/5 • 2/3 3 挿入図 国土地理院発行の5万分の1「前橋」「高崎」を使用した。 4 遺跡の位置の基準 国土地理院三角点及び水準点を照合済み 基準点 第区系 座標値 x = 38,038.000m y = -63,116.000m A-0 地点 水 準 点 BM H = 77.50m 等高線 5cm グリッド 4m間隔

5 土層断面の土色名及び土器類の色調名は「新版標準土色帖」による。

目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
第1章	調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
	1 調査に至る経緯・・・・・・・・・・ 1
	2 発掘調査の経過・・・・・・・・ 1
	3 標準堆積土層・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第2章	遺跡の立地と環境・・・・・・・2
第3章	遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
	(1) 住居址・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
	(2) ピット・・・・・・・11
	(3) 土 坑13
第4章	まとめ・・・・・・・14
出土遺物	7観察表・・・・・・・・・・・・16
遺構実涯	喇図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
遺物実涯	N図······ 図1~5
図	版・・・・・・ 図版1~8
全体平面	前図(S = 1:200)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第 1 章 調査の概要

1調査に至る経緯

前田 I 遺跡は宅地造成工事に伴う都市計画法 29条の開発行為の許可にさきがけて前橋市宅地開発指導要網(昭和48年前橋市告示第10号)第9条(文化財保護)の規定により開発事業者エヌ・ティ・ティ中央移動通信株式会社から市教育委員会に事前協議があり、確認調査を行ったところ平安時代の住居址及びピット、土坑を確認した。開発事業者と協議調整のうえ平成3年7月10日から発掘調査を実施することになり、前橋市教育委員会のもとに組織している前橋市埋蔵文化財発掘調査団の立ち会い指導のもとにスナガ環境測設株式会社が発掘調査に着手した。

2 発掘調査の経過

経過は次の通りである。(調査日誌抄)

平成3年7月10日 作業事務所設置.機材の搬入

7月11日 重機にて表土掘削作業開始. 基準点座標杭の設置

全体平面図(1:200)作成開始

7月17日 ジョレン搔き. プラン確認作業開始

調査区内に地下水が湧く為本日からポンプ3台で排水作業を始める

(8月15日まで続く)

7月19日 水準点 (BM). グリッド杭設置

7月22日 ピット・土坑調査開始. 写真撮影開始

7月23日 住居址調査開始. 平面・断面図 (1:20) の測量開始

7月27日 遺物上げ開始

8月 3日 竈の調査開始

8月10日 住居址掘り方の調査開始

8月15日 調查区内清掃,全体写真撮影

8月20日 土砂埋戻し、あとかたづけ、調査終了

整理作業

8月20日 遺物洗浄開始

8月26日 測量図面の整理作業開始. 原稿執筆開始

8月29日 遺物注記開始

8月30日 測量図の製版カメラによる縮小作業開始 住居址床面積の図上計測を行う

9月11日 遺物接合. 石膏入れ作業開始

9月18日 遺物実測開始

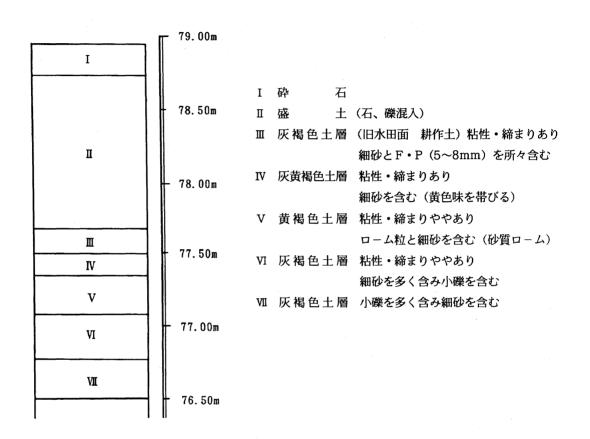
10月 1日 報告書の原稿校正.編集作業開始

10月14日 遺物写真撮影を行う

12月 5日 報告書原稿印刷

3 標準堆積土層

第 1 図 標準堆積土層



第 2 章 遺跡の立地と環境

前田 I 遺跡は前橋市の中心市街地から東南約8Kmの東善町内にあります。主要地方道高崎・駒形線が東西に走り、これに主要地方道藤岡・大胡線が南北に走って乗り入れ、更に市道00-96号線が朝倉町 - 広瀬町 - 山王町 - 東善町を乗り入れる交差点があります。それがこの東善町交差点であります。この交差点を駒形町へ向かって400m程行き一級河川韮川に架かる駒形橋を通り200m程で駒形町を北西に縦断する主要地方道前橋・古河線に出ます。これより北西へ8Km前橋市街地、北へ8Km勢多郡大胡町、東南へ7Km伊勢崎市街地に至る道路交通の要所であります。主要地方道の整備された昨今、東善町交差点に面して通運・運輸・倉庫など大企業の社屋が立ち並び急速に市街化が進んでいます。この交差点の南東に位置するのが前田 II 遺跡であります。

第 2 図 前田Ⅱ遺跡 周辺遺跡の位置図 (S = 1:50,000)



- ① 前田耳遺跡 ② 前田道
- 前田遺跡 ③ 文珠山古墳
- ④ 善養 寺
-) 金冠塚古墳

- ⑥ 木ノ宮遺跡
- ⑦ 亀塚山古墳
- ⑧ 経塚古墳
- ⑨ 天神山古墳
- ⑩ 坊山遺跡

- ① 後閑団地遺跡
- ⑫ 後閑Ⅱ遺跡
- ⑬ 八幡山古墳
- ⑭ 倭文神社
- 15 火雷神社

第3章 遺構と遺物

調査地は、前田遺跡(1991年3月調査報告書)で住居址など多くの遺構の検出地点から100m程の北西に位置している。現地は在来農地を約1.3m盛土して宅地化したもので遺構確認面は地表から1.60m~1.80mを排土した標準堆積土層図第V土層で土師器住居址14軒、ピット45ケ所、土坑1基の確認をした。

(1) 住 居 址

1 号 住 居 址 (第3図、図版1)

調査区の西壁 $C-0\cdot1$ から $D-0\cdot1$ グリッドに位置する。覆土は粘性で締まりのある灰褐色・暗褐色土が堆積している。

一部北壁が調査区域外にあり、東壁側は2号住居址、15号住居址に一部張り出して重複している。新旧関係は、遺構確認時より範囲がはっきりし全体が残っていることにより本住居址が他の住居址より新しいと思われる。

住居址の形状は長軸(南北方向) 2.90m、短軸(東西方向) 2.66mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-6°-Eを測る。確認面から17cm程掘り込んで床面に達する。床面は第V、VI土層を掘り込んで作られ、全面に8cm程の貼り床が見られる。床面積は6.3 ㎡を測る。ピット、壁溝は確認されなかった。

掘り方は全体に平坦であるが住居址西壁寄りに長径150cm、短径60cm、深さ2~3cmの不整形の落ち込みや、中央付近には長径44cm、短径42cm、深さ5cm程の円形や長径50cm、短径24cm、深さ3cm程の不整形をした落ち込みも見られた。

竈は南東側のコーナーに位置し15号住居址内に張り出している。覆土は灰、焼土粒を多く含む暗褐色・灰 黄褐色土が堆積している。竈の主軸方向はN-135°-Eを測り、コーナーに構築されている。

竈の寸法は全長105cm、焚口部幅50cm、燃焼部長+焚口部長=70cm、煙道部長35cm、煙道部立ち上がり角度29°を測る。

遺物は土師器、須恵器、土師質土器などの破片がほとんどで、総数 141 点出土している。実測、図示したものは、竈より出土した土師質土器埦(H-1竈1)がある。時期は 10 世紀後半代と思われる。

2号住居址(第7図、図版1)

調査区 $B-1 \cdot 2$ から $C-1 \cdot 2$ グリッドに位置する。覆土は粘性で締まりのある灰褐色土が堆積している。住居範囲は、東壁側の大部分がごみ穴で破壊され竈も不明である。南壁側は1 号住居址、15 号住居址と重複している。新旧関係は地層断面の切り合いから旧い順に2 号 -1 号と思われる。

住居址の形状は、遺構の重複と建設廃材のごみ穴で攪乱され北壁側を残して他は確認出来なかった。確認面から $16\sim20$ cm 掘り込んで床面に達する。床面は第V 土層を掘り込んで作られている。ピット、壁溝は確認できなかった。

遺物は土師器甕、須恵器城・甕などの小破片がほとんどで、総数162点出土しているが復元には至らず、一部破片より9世紀後半~10世紀代の特徴を持つ土器も見られた。

3 号 住 居 址 (第4.5 図、図版 1.2)

調査区 $D-1 \cdot 2$ から $E-1 \cdot 2$ グリッドに位置する。覆土は粘性で締まりのある灰褐色・暗褐色土が堆積している。北壁側は15 号住居址と重複している。新旧関係は、15 号住居址の堆積土層を壊して本住居址が新しく構築されている。

住居址の形状は長軸(南北方向)4.6m、短軸(東西方向)4.0mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-6° -Eを測る。北壁に対し南壁が1.0m程長く東側へ広く測れた。確認面から6~10cm掘り込んで床面に達する。床面は第V土層を掘り込んでほぼ平坦に作られている。床面積は14.9㎡を測る。

ピット、壁溝は確認されず、北壁側に土坑が1基確認された。形状は長径156cm、短径94cm、深さ22cm の楕円状を呈す。

竈は東壁の中央やや北寄りに位置し、竈の主軸方向は $N-59^{\circ}-E$ を測る。覆土は炭化物、焼土粒を多く含む褐色・暗褐色土が堆積している。

竈の寸法は全長100cm、焚口部幅70cmを測り、燃焼部は床面より7cm掘り込まれている。

遺物は土師器甕、須恵器甕・埦、土師質土器埦、灰釉陶器埦などの小破片がほとんどで、総数 181 点出土した。図示出来たのは土師質土器坏(H-3-1)、砥石(H-3-2)の2 点である。時期は 10 世紀後半と思われる。

4 号 住 居 址 (第8図、図版2)

調査区の西側D $-1 \cdot 2$ グリッドに位置する。覆土は粘性で締まりのある灰褐色・黄褐色土が堆積している。 東壁側は5号住居址と西壁側は15号住居址と重複する。北壁側はごみ穴で破壊され南側の一部を残すのみで ある。新旧関係は本住居址が5号、15号住居址によって切られていることから本住居址が旧い。

住居址の形状は、住居範囲の一部が確認できたのみで全体は不明である。

床面は第V土層を $6\sim10$ cm掘り込んで作られており、ほぼ平坦な床である。ピット、壁溝は確認されなかった。竈は不明である。

遺物は土師器、須恵器の小破片のみで総数 120 点出土した。図示したものは土錘(H-4-1)、擦石(H-4-2)である。時期は不明である。

5 号 住 居 址 (第8.9 図、図版2)

調査区の中央寄り $C-2\cdot3$ から $D-2\cdot3$ グリッドに位置する。覆土は粘性で締まりのある暗褐色・黄褐色土が堆積している。西壁側は4号住居址と重複している。北西壁コーナーはごみ穴で破壊されている。新旧関係は本住居址が4号住居址を掘り込んで新しく構築している。

住居址の形状は長軸(南北方向)4.2m、短軸(東西方向)3.52m の隅丸方形を呈し、主軸方向はN-3° -Eを測る。確認面から20cm 程掘り込んで床面に達する。床面は第V、VI土層を掘り込んで作られ、全面に $6\sim12$ cm の貼り床が見られる。床面積は調査範囲で12.3 ㎡を測る。

壁溝は確認されず、土坑とピットが合わせて3か所床面から下記の通り確認された。

		形状寸	法cm		AM. 40		
ピット・土坑の名称	形状	長径	短径	深	備考		
P - 1	円	31	30	12	北西寄り 底部より楕円状の扁平な石出土(礎石)		
P – 2	円	29	28	12	中央部やや北寄り底部より楕円状の扁平な石出土 (礎石)		
D - 1	楕円	84	70	17	北東コーナー 土師器・須恵器片出土		

また上記の他に貼り床下 (掘り方) から床下土坑と思われる楕円状の長径80cm、短径74cm、深さ8cmと 楕円状の長径120cm、短径76cm、深さ10cmの土坑と北壁寄りと中央から南壁へかけて3~10cmの不整形 な掘り込みも見られた。

竈は東壁の中央やや北寄りに位置し、焚口付近の床を10cm 程高く作られている。また竈燃焼部がなだらかに5cm 程掘り込まれ中央に径25×20cm 厚み8cm 程の支脚石と思われる石が1点検出されている。覆土は粘性で締まりのある炭化物・焼土粒を含む灰褐色土が堆積している。竈の主軸方向はN-88°-Eを測る。竈の寸法は全長140cm、焚口部幅75cm、燃焼部長+焚口部長=85cm、煙道部長55cmを測る。

遺物は土師器甕・坏、須恵器甕・埦などの破片が総数357点出土している。図示出来たものは土師器甕 (H -5-1)・坏 (H -5-3)、須恵器坏 (H -5,D -1-1)・皿 (H -5-2)、鉄製品 (H -5-4)、鎌 (H -5-5)、自然石 (H -5 竈1) など 7点である。時期は 10 世紀前半と思われる。

6 号 住 居 址 (第10・11 図、図版2)

調査区の北壁寄りに位置し、B-4.5からC-4.5グリッドに位置する。 **復**土は暗褐色土と粘性で締まりのある黒褐色土が堆積している。

住居址の形状は長軸(南北方向)5.20m、短軸(東西方向)5.06mの隅丸方形を呈し、主軸方向はほぼ $N-0^\circ$ — Eを測る。確認面から12cm 程掘り込んで床面に達する。床面は第V、VI土層を掘り込んで作られている。床面積は22.7 ㎡を測り、壁溝は確認されず土坑、ピット等を合わせて15か所確認した。土坑は南東寄りに1か所確認した。ピットは中央に2か所、壁側に12か所を確認した。その中でP-4、P-10、P-11からは底部より礎石と思われる扁平な河原石を検出した。他の壁際のピットは配置の規則性などは、はっきり認められないが形状から壁柱穴になると考えられる。床面には焼土粒・炭化物・ロームブロックを含む灰黄褐色土が堆積していた。

竈、炉等は確認されず西南寄りにわずか焼土範囲が見られたがほぼ床面全体に焼土粒、炭化物などの混入が見られた。また床面ほぼ全体に6~9cmの貼り床が見られ、掘り方で長径160cm、短径110cm、深さ17cmの楕円状の床下土坑が1か所と住居址北側と南側にかけて4~10cmの落ち込みが確認された。

遺物は土師器甕・坏、須恵器埦などの破片の他に土製品土錘、古銭など総数 462 点出土した。実測、図示出来たものは須恵器坏(H-6-3)・埦(H-6-1・4)、土師器坏(H-6-2)・甕(H-6-5)、土製品土錘(H-6-6・7)、古銭(H-6-8)など 8 点である。土器類の時期は 9 世紀後半~10 世紀前半頃と思われる。また古銭は唐銭の開元通寳(初鋳年代 武徳四年 西暦 621 年)が一枚出土しているが古銭は損傷、摩耗が著しい。

床面から確認されたピット、土坑の形状寸法は下記の通り確認した。

10 1 14 0 7 74		形状寸	法cm		/H: -17.			
ピット・土坑の名称	形状	長径 短径 深		深	備考			
P - 1	楕円	31	22	20	北西コーナー U字形の掘り込み			
P - 2	楕円	28	24	16	西壁やや北寄り U字形の掘り込み			
P - 3	楕円	43	36	25	西壁中央 U字形の掘り込み			
P-4	円	35	34	6	西壁やや南寄り 浅い掘り込みで底部に扁平の河原 石出土			
P - 5	楕円	46	43	22	住居中央 緩やかな掘り込み。一段下がった円状の 掘り込みあり			
P - 6	楕円	54	46	31	住居中央寄り 東側一段下がった楕円状の掘り込み を持つ			
P - 7	円	42	40	27	南東コーナー付近 U字形の掘り込み			
P – 8	楕円	30	25	17	南東コーナー付近 西側に一段下がった円状の掘り 込みあり			
P – 9	楕円	29	26	23	東壁中央 U字形の掘り込み			
P - 10	円	42	41	31	北東コーナー ロート状の掘り込み。底部に丸い河 原石出土			
P – 11	円	29	29	32	北東コーナー付近 U字形の掘り込み。底部に扁平 な石出土			
P - 12	円	30	30	26	北壁中央付近 一段下がった掘り込みあり			
P – 13	楕円	40	30	33	北壁やや西寄り 東側に段差あり			
P – 14	楕円	43	42	48	南東コーナー U字形の掘り込み			
D – 1	楕円	170	124	8	南東コーナー付近 掘り込み浅く底部平坦			

7 号 住 居 址 (第12・13 図、図版 2・3)

調査区の中央やや南壁寄り $C-4\cdot5$ から $D-4\cdot5$ グリッドに位置する。覆土は粘性で締まりがある炭化物・ローム粒・細砂を含む褐色・暗褐色土が堆積している。

南壁側は8号住居址と重複し、南西コーナーがごみ穴で壊されている。住居址の新旧関係は断面より本住

居址が新しい。

住居址の形状は長軸(南北方向)4.3m(推定)、短軸(東西方向)4.0mの隅丸方形を呈し、主軸方向は、N-4°-Eを測る。確認面から20cm程掘り込んで床面に達する。床面は第V、VI土層を掘り込んで平坦に作られており、全面に3~15cmの貼り床も認められ、竈付近は細砂・礫を含み全体にローム粒、炭化物などの混入が見られた。床面積は調査範囲で14.6 ㎡を測る。壁溝は確認されなかった。

土坑は床面の中央西寄りに長径74cm・短径68cm・深さ8cmの円状を呈し、立ち上がり部分に白色粘土で厚4cm程の巻立が確認された。ピットは北西コーナー付近に長径28cm・短径25cm・深さ17cmの円状を呈している。

竈は東壁中央やや南寄りに位置し、8号住竈と近接して確認された。覆土は焼土粒・炭化物を含む暗褐色・ 灰黄褐色土が堆積している。竈の主軸方向はN-96°-Eを測る。

竈の寸法は全長 100cm、焚口部幅 55cm を測り、燃焼部中央には長さ 35cm、幅 16×10 cm の支脚石と右袖側に長さ 35cm、幅 15×8 cm 程の袖石が検出された。両方の石は、ほぼ半分地中に埋め込まれていた。竈は比較的形状を残し、床面より 10cm 程掘り込まれていた。

遺物は土師器甕・坏、須恵器甕・埦などの破片と鉄製品、石など総数 233 点出土している。図示出来たものは土師器坏 (H-7-1)、鉄製品鎌 (H-7-2) など 2 点である。時期は 10 世紀前半~後半と思われる。

8 号 住 居 址 (第12・13 図、図版 2・3)

調査区の南壁寄り $D-4\cdot5$ から $E-4\cdot5$ グリッドに位置する。覆土は粘性で締まりのある、わずかローム粒・炭化物を含む褐灰色土が堆積している。

7号住居址が北側半分を取り込んで重複している。南西コーナーがごみ穴によって壊されている。7号住居址との新旧関係は本住居址が旧い。

住居址の形状は東西方向3.6m、南北方向はごみ穴で攪乱され不明、確認面から16cm程掘り込んで床面に達する。床面は第V土層を掘り込んで作られている。床面積は不明である。

ピット、壁溝は確認されなかった。

竈は東壁中央やや北寄りに位置し、7号住竈と近接して確認された。覆土は焼土粒・炭化物を含む灰褐色・灰黄褐色土が堆積している。竈の主軸方向は $N-111^\circ-E$ を測る。竈の寸法は全長 105cm、焚口部幅 55cm を測り、やや形状が南向きになっている。燃焼部は床面より 4cm 程掘り込まれている。

遺物は土師器甕・坏、須恵器甕、埦、蓋などの破片が総数で265 点出土している。図示出来たものは須恵器蓋 (H-8-1)、土錘 (H-8-2)、土師器埦 (H-8 竈 1) など3 点である。時期は9 世紀中頃~後半と思われる。

9 号 住 居 址 (第13・14 図、図版3)

調査区の南壁やや東寄りE-4・5グリッドに位置する。覆土は粘性で締まりのある、わずかローム粒・炭化物・細砂を含む灰褐色・暗褐色土が堆積している。南壁側は一部調査区域外にある。東壁側は14号住居址

と重複する。新旧関係は本住居址が14号住居址を切っていることから本住居址が新しい。

住居址の形状は東西方向 4.25m、南北方向は調査区外の為不明、北東、北西コーナーは隅丸形を呈している。確認面より 15~20cm 掘り込んで床面に達する。床面積は調査範囲で 8.2 ㎡を測る。

ピット、壁溝は確認されなかった。

竈は北壁中央に位置し、覆土は焼土粒・炭化物を含む灰褐色・黒褐色土が堆積している。竈の主軸方向は $N-23^{\circ}-E$ を測り、竈の寸法は全長 120cm、焚口部幅 62cm を測り、形状がやや東向きに作られ、竈焚口付近には長さ 16cm、幅 7cm 程の細長い石(用途不明)を検出した。

遺物は土師器甕・坏、須恵器甕・埦などの破片が総数212点出土している。図示出来たものは土師器坏(H $-9-1\cdot2\cdot3\cdot$ 竈1)・甕(H-9竈2)など5点である。時期は9世紀中〜後半と思われる。

10 号 住 居 址

当初9号住居址と重複する遺構と考えられたが、調査の進捗に伴って重複と認められず、10号住居址は欠番とした。

11 号 住 居 址 (第15 図、図版3)

調査区の東壁やや北寄りB-6・7からC-6・7グリッドに位置する。覆土は粘性で締まりのある黒褐色土が堆積している。東壁は調査区外に位置し南壁側は埋立時のごみ穴により攪乱破壊されている。北壁側は12号住居址と重複している。新旧関係は本住居址が12号住居址を切っていることから本住居址が新しい。

確認面から5~9cm 程掘り込んで床面に達する。遺構は浅く残りは良くない。

住居址の形状は北西コーナーが隅丸を呈し、他は不明である。ピット、壁溝は確認されなかった。

竈はごみ穴で攪乱されたか、調査区域外に所在するか確認できなかった。

遺物は土師器**甕**、須恵器坏・婉などの小破片が総数16点出土している。接合、実測には至らなかった。時期は不明である。

12 号 住 居 址 (第15 図、図版3)

調査区の東壁やや北寄りB-6・7グリッドに位置する。覆土は粘性で締まりのある灰褐色土が堆積している。東壁側は調査区域外に位置し南壁側は11号住居址と重複している。新旧関係は11号住居址が本住居址を切っていることから本住居址が旧い。

確認面から5cm程掘り込まれて床面に達するが遺構は浅く残りは良くない。

住居址の形状は北西コーナーが隅丸を呈し、他は不明である。ピット、壁溝は確認されなかった。

竈は、調査区域外のため確認できなかった。

遺物は土師器甕、須恵器甕・埦など総数11点出土している。遺物は少なく接合、実測には至らなかった。 時期は不明である。

13 号 住 居 址 (第16 図、図版3)

調査区の南壁中央やや西寄りE-2・3グリッドに位置する。 覆土は粘性、締まりのある暗褐色土と黒色土と灰褐色土の混土が堆積している。 南壁側は調査区域外のため不明である。

確認面から5~10cm 掘り込んで床面に達する。遺構は浅く残りは良くなかった。

住居址の形状は北東、北西コーナーが隅丸を呈し、その他は調査区域外にあり確認できなかった。

ピット、壁溝、竈は確認できなかった。

出土遺物は土師器坏片が1点と極めて遺物が少ない。

14 号 住 居 址 (第14 図、図版 4)

調査区の南壁やや東寄りに位置しE-5・6グリッドに位置する。覆土は粘性で締まりのある暗褐色土が堆積している。南壁側は調査区域外に位置し西壁側は9号住居址と重複する。新旧関係は本住居址の西壁を9号住居址が切っていることから本住居址が旧い。

住居址の形状は住居北東側範囲と竈範囲が残る程度で全体がはっきりしない。壁の掘り込みは浅く、わずかな範囲が確認された。

ピット、壁溝は確認されず住居北壁側に土坑1か所を確認した。形状は長径110cm、短径64cm、深さ5~7cmの楕円状で底部に2か所(北側と南側)径21×20cm深さ20cm前後の掘り込みが2か所確認された。

竈は東壁側に位置し一部が調査区外にある。覆土は灰、細砂を含む暗褐色・灰黄褐色土が堆積している。 竈の主軸方向はN-102°-Eを測る。

竈の寸法は全長 110cm、焚口部幅 55cm、燃焼部は床面より 10cm 程掘り込まれている。

出土遺物は土師器・須恵器甕片や羽釜片など総数12点出土している。接合、実測には至らなかった。

15 号 住 居 址 (第7図、図版4)

調査区の西側中央付近C-1から $D-1 \cdot 2$ グリッドに位置する。覆土は粘性、締まりのある灰褐色・暗褐色土が堆積している。

東壁側は北寄り一部をごみ穴により攪乱破壊されている。東壁側の竈の部分は4号住居址の西壁を、北壁側は2号住居址の南壁をそれぞれ取り込んで構築されている。南壁側は3号住居址に、西壁側は1号住居址に取り込まれて重複していることから新旧関係は2、4号住居址より新しく、1、3号住居址より旧い。

住居址の形状は南北方向4.2m、東西方向不明。確認面から18~20cm掘り込んで床面に達する。床面は第 V土層を掘り込んで作られている。床面積は調査範囲で10.0 ㎡を測る。

壁溝は確認されず、ピットは東壁の竈の北側から径30×30cm、深さ10cmを確認した。土坑は竈南側より楕円状で長径56cm、短径50cm、深さ22cmを確認した。土坑は確認した位置や土器、石などの遺物が出土していることから貯蔵穴と思われる。

竈は東壁中央やや南寄りに位置する。覆土は粘性で締まりのある焼土粒、灰、炭化物などを含む黒褐色・灰褐色土が堆積している。竈の主軸方向はN-80°-Eを測る。

竈の寸法は全長80cm、焚口部幅70cm、を測り、燃焼部は床面より9cm 程掘り込まれている。

遺物は土師器甕・坏、須恵器甕・埦や羽釜の破片など総数 196 点出土している。図示出来たものは土師器 坏 (H-15-4・竈1)、須恵器埦 (H-15-3)・羽釜 (H-15-1)、土師質土器埦 (H-15-2) など 10 世紀前半~後半と思われるもの 5 点と他に石鏃 (H-15-5) を検出した。

(2) ピット(第17・18・19図、図版4)

住居範囲と同じ面や遺構内に大小45ケ所のピットが確認された。形状は円または楕円で灰褐色、暗褐色土が堆積し掘り込みが段をなすものや底に扁平の河原石を据え、礎石に使用したと思われるピットも確認された。遺物は土師器、須恵器片など数点複数のピットより検出した。

ピットは掘立柱建物の柱穴と考えられるが平面的に柱穴数、方向、間隔等が一定せず明確にすることができなかったので、ピットとして一覧表に記載した。

ピットー覧表 その1

単位 cm: () は推定値を示す

No	遺構位置		形状、	法		}±: →v
NO	(グリッド)	長径	短径	深	形状	備 考
1	B – 1	25	_	17	円	U字形に掘り込まれている
2	B-1•2	22	_	7	円	底部は平坦で浅い
3	B – 1	30	25	14	楕円	底部東壁側に掘り込みあり 土師、須恵器片2点出土
4	C – 1	42	_	23	円	底部平坦 土師、須恵器片 13 点と石出土
5	C – 1	50	40	26	楕円	底部中央に掘り込みあり 土師、須恵器片5点出土
6	C – 1	18	_	15	円	底部平坦 Pitとほぼ同じ大きさの石1点と土師片1点
7	C – 1	42	33	15	楕円	Pit上部と底部に大小の石2個と土師、須恵器片5点出土
8	D – 1	37	_	17	円	底部東壁側が掘り込まれている 土師、須恵器片3点
9	D – 1	33	(20)	21	楕円	底部平坦 Pit10 と北壁側が重複 土師、須恵器片3点
10	D – 1	29	(22)	13	楕円	U字形の掘り込み Pit9と重複 石1点出土
11	D – 1	50	39	22	楕円	底部平坦 土師、須恵器片7点出土
12	D – 1	(46)	40	13	楕円	底部平坦で石がありPit13と北壁側で重複 土器片3点
13	D-1	33	(24)	12	楕円	底部平坦 土師、須恵器片2点出土
14	D – 1	43	35	18	楕円	底部平坦 土師、須恵器片3点出土
15	D – 1	30		13	円	底部平坦
16	D – 2	47	_	31	円	底部平坦 土師、須恵器片8点出土

	ヒット	一見	衣	, נטיב	4	単位 CIII: () は推足値を表す
No	遺構位置形状寸法			備考		
NO	(グリッド)	長径	短径	深	形状	ин <i>1</i> -
17	B – 2	30	_	13	円	底部平坦
18	A – 3	23	_	8	円	底部平坦で浅い 土師、須恵器片2点出土
19	C – 4	24		23	(円)	底部より使用痕のある石が出土(P-19-1) Pit20 と重複
20	C – 4	40	(35)	26	(楕円)	底部U字形 Pit19・21と重複 石出土
21	C – 4	26	-	24	(円)	底部U字形 Pit20と西壁側で重複 土器片3点出土
22	C – 4	30	-	23	円	底部平坦 土師、須惠器片2点出土
23	C – 4	30	27	16	楕円	底部 U 字形 土師器片 2 点出土
24	C – 4	32	(28)	22	楕円	底部平坦 東壁側で Pit25 と重複
25	C – 4	32	(30)	29	楕円	底部掘り込みあり Pit24 と重複 須恵器片 1 点出土
26	C – 4	49	_	20	円	底部平坦
27	C – 4	44	_	23	円	底部U字形 使用痕のある石1点出土(P-27-1)
28	D – 4	18	14	9	楕円	ピットが小さく掘り込みが浅い
29	A – 5	70	62	13	楕円	底部丸みを持ち掘り込みが浅い 土器片2点出土
30	A – 5 • B – 5	32	_	9	円	底部平坦 東壁側よりなだらかな掘り込みあり
31	B – 6	20		18	円	西壁側一段下がった掘り込み 須恵器片1点出土
32	B-6	29	_	9	円	底部掘り込みあり
33	C – 6	36	_	25	円	底部一段下がった掘り込みあり Pit34と重複
34	C - 6	26	23	10	楕円	底部丸みを持ち浅い Pit33と重複
35	C - 6	26		17	円	底部 U 字形 土師器片 1 点出土
36	C - 6	32		10	円	底部平坦
37	C – 5	30	_	20	円	底部平坦 土師器片1点出土
38	C-6	28	24	13	楕円	底部平坦
39	C - 6	50	45	30	楕円	底部中央にU字形の掘り込みあり
40	D – 6	66	50	18	楕円	底部中央に掘り込みあり 土師器片3点出土
41	D – 6	43	40	10	楕円	底部平坦 土師器片3点出土
42	D – 6	40	38	13	楕円	底部東壁側が掘り込まれている 土師器片3点出土
43	D – 6	32	_	18	円	西壁側に掘り込みあり 土師器片1点出土
44	C – 6	21		25	円	底部西壁側に掘り込みあり
45	D – 6	35		14	円	底部西壁側に掘り込みあり

(3) 土 坑(第19図)

全体で1か所北東隅に確認した。

形状は楕円で口径が大きいわりに掘り込みが浅く、灰褐色土が堆積していた。

遺物は出土していない。用途は不明である。

形状は、下表の通りである。

土 坑 一 覧 表

単位 cm: () は推定値を表す

遺構位置			形状、	法		備考
No ((グリッド)	長径	短径	深	形状	備考
1	B-6	134	116	8	楕円	底面平坦浅い掘り込み

第4章 まとめ

前田 Ⅱ 遺跡は北側を主要地方道高崎・駒形線が走り、南側は水田農業地帯が広がる一角にある。周囲はかって広瀬古墳群と称され県内屈指の古墳群が所在していた地域で今も貴重な古墳が点在している。

本遺跡では住居址14軒、ピット45か所、土坑1基と遺物として土師器、須恵器、土師質土器、灰釉陶器、 鉄製品、古銭、石製品、土製品などを検出した。

住居址について

本遺跡で確認された住居址の14軒は確認面までの深さが160~180cmの盛土と旧耕作土で堆積されていた。遺構の一部が建築廃材のごみ穴によって攪乱破壊されたものや調査区域外にかかる遺構もあった。また調査区西壁側や南壁側では著しい重複等が見られ、出土遺物から極めて短い期間に住居の変遷があったことが窺える。

住居址の形態は隅丸の方形、長方形で竈は東向きが殆どで一部の竈でコーナーに位置するものや、北向きに位置するもの、また住居址に対してやや形態が斜めに向いているものなどが確認され、余り規則性は見られなかった。また竈の袖石や支脚石に用いた河原石も検出した。

ピット、土坑は3・5・6・7・14・15号住居址に確認され、とくに6号住居址壁際には多数のピットが見られ、その中の数個のピット底面より礎石と思われる扁平の河原石が確認されている。

床面は硬い砂質ロームで作られており、床面が湿潤状態である6・7・8号住居址は暗褐色土中に焼土粒、炭化物、灰等を混ぜて貼り床にしたと思われる。

遺物は遺構全体よりほぼ完形品や破片、小片など多数検出されて復元できるものも数点検出されている。 出土遺物は土師器、須恵器の坏・埦・甕等の破片を中心に総数約2627点出土している。時期は9世紀~10世紀代の平安時代の遺物が検出されている。

前田遺跡(1991年3月調査報告書)の住居形態とも似ており、出土遺物等もほぼ同時期の遺物が見られるなど、前田遺跡と連続する同時期の遺跡と考えられる。

ピットについて

ピットは調査区の東壁側、中央付近、西壁側区域からまとまって平安時代の遺構の確認面に見られ、住居 址内外付近に点在し、ほぼ円形・楕円形で二段に掘り込まれていたものや底部に扁平な河原石を礎石として 用いたものなどを確認した。ピットは規則性がなく住居址に付設されたものか掘立柱建物址として掘られた ものかはっきりとらえられなかった。

時期的には住居址からは9世紀 ~10世紀代の遺物が出土しておりピットからも同時期の土器片が見られることからピットは住居址とほぼ同時期かそれ以後に設けられたものと思われる。

土坑について

調査区北東寄りに1か所確認され形状は楕円形で掘り込みは浅く、遺物の検出はなく時期は不明であるが ピットと同じ層で確認していることから同時期の土坑と思われる。

参考文献

清里·陣場遺跡 1981 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 中尾遺跡 (遺物編) 1984 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 下東西遺跡 1987 群馬県教育委員会

(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団

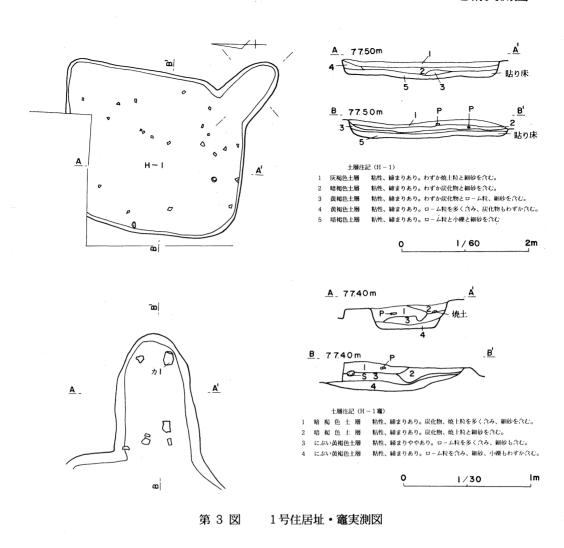
芳賀東部団地遺跡 I 1988 前橋市教育委員会 元総社明神遺跡 I 1991 前橋市埋蔵文化財発掘調査団

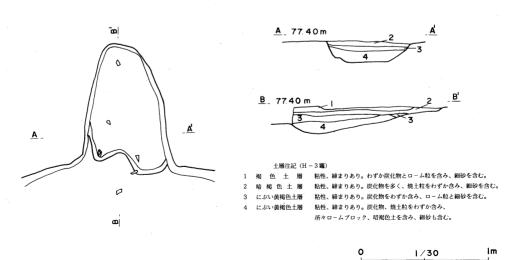
出土遺物観察表 註:法量は①□径②底径③高台径④器高⑤長⑥幅⑦厚はcm、⑧重はgで表し、()は推定値を示す。

NO	出土場所	種類	法	₫.	胎土焼成	色調	器形・成形・整形の特徴	遺存備考	図版
1	H-171	生師質婉			粗・酸化	鈍い橙	高台部は潰れておりへうの当りが数条見られる。体部外面下	体部下位	DI VI
1	H-191	工師貝观	2 1.5		THE BOTT	更化りが豆	位に不定方向のナデ、内面ナデ、ロクロ整形、底部回転糸切		5
								~底部	ъ
		Largetr	@ (5.0)		**** * 6/1.	ABIT!	り、付高台。	L/FE	
2	H-3-1	土師質坏	②(5.8)		普通・酸化	褐灰	底部はわずか上底気味。体部は直線的に開き、外面ロクロ整	/5残	_
							形、内面ナデ、底部回転糸切り。		5
3	H-3-2	砥石	⑤ 8.5	6 3.5		灰オリ	四面使用、表面平滑化。石質は粘板岩。		
		ļ	⑦ 2.3	8 91.97		-ブ			8
4	H-4-1	土錘	⑤ 4.4	6 1.6	還元	褐灰	(3) 9.50 穿孔径 0.6	ほぼ完形	8
5	H-4-2	擦石	⑤ 11.6	6 9.4			 楕円形、扁平な自然礫、片面擦痕跡あり。 		
			② 3.2	8 500					8
6	H-5-1	土師器賽	①(21.4)		普通・酸化	鈍い橙	口縁部は「コ」の字状を呈し、内外面ナデ。肩部は外面へラ	口縁部¼	
							削り、内面ナデ。	残	5
7	H-5-2	須恵器高	①(13.3)	3 6.2	普通・還元	明オリ	底部は外面直立、内面外傾する高台。体部は直線的で口縁部	%残	
	İ	台付皿	4 2.9			- ブ灰	で緩やかに外反する。ロクロ整形、底部回転糸切り、付高台。		5
8	H-5-3	土師器坏	1 (11.9)	③ 3.7	普通・酸化	鈍い褐	底部はわずか丸味を帯びる。体部は緩く内彎し口縁部に至る。	%残	
							底部肉厚、口縁部外面へぅ削り。底部へぅ削り後ナデ、内面		5
							ナデ。		
9	H-5-4	鉄製品	6 0.7				現存長 30.4 ⑧ 70.89 棒状の鉄製品。時期不明。		8
10	H-5-5	鉄製品鎌	6 4.0	⑦ 0.3	· .		現存長 12.7 ⑧ 85.74 身部が彎曲し背側が丸い、小型。		8
11	H-5 1 1	石	⑤ 25.4	6 16.0			⑦ 5.8 ⑧ 3520 楕円形、自然石使用痕あり。		8
12	H-5	須恵器坏	①(13.0)	4 3. 2	普通・還元	灰	★ 底部はわずか上底。底部と体部の境に段を持ち直線的に立ち	%残	
	D-1-1	į					 上がり□縁部でわずか外反する。内面ナデ、ロクロ整形、底		5
							部回転糸切り。		ĺ
13	H-6-1	須恵器療	①(12. 9)	4) 3, 7	粗・還元	灰	体部は緩やかに彎曲し口縁部で外反する。ロクロ整形、底部	%残	
"		SOBTIBLE	(12.0)	.	111 24270	"	回転糸切り、高台部はがれ。	732	5
14	H-6-2	十三年	①(13.0)	Ø 5.6	密・還元	鈍い赤	底部は平底、体部は緩やかに内彎し口縁部に至る。底部、体	1/4残	Ļ
14	1 10 2	-T-m444-71.	(13.0) (4) 4.1	© 0.0	TE - ME/L	褐	部下半にへう削り。内面黒色。	74724	5
15	11 6 2	活由9947	①(12.6)	Ø(€ 0)	粗・還元	 		1/6件	-
15	H-6-3	須思裔小		⊘ (5. 9)	祖・遠元	灰	底部はわずか上底、彎曲気味の体部から口縁部で外反する。	½残	
-	l	/X-tr00.et	④ 3.6			FF#	ロクロ整形、底部回転糸切り未調整。	17228	6
16	H-6-4	須思器拠	①(14.6)	1	粗・還元	灰黄	体部は下端部に若干の張りを有し直線的に外反する。体部外	14弱残	
	<u> </u>	1	<u> </u>		 	L	面ロクロ痕、内面ナデ。底部回転糸切り、高台部欠損。	<u> </u>	6.
17	H-6-5	土師器賽	1 (19.4)		普通・酸化	鈍い褐	口縁部は「コ」の字状の屈曲が弱く、口唇部に沈線あり。肩	1	
<u> </u>		<u> </u>	ļ		ļ		部外面横位のヘラ削り。内面ヘラナデ、口縁部内外面ナデ。	弱残	6
18	H-6-6	土錘	5 4.5	6 1.9	酸化	鈍い橙		完形	8
19	H-6-7	土錘	⑤ 3.2	6 2.9	酸化	灰褐	⑧ 10.07 穿孔径 0.4	ほぼ完形	8
20	H-6-8	貨幣	8 1.97			<u> </u>	古銭 唐銭の開元通寶(初鋳年代 武徳四年 西暦621年)	1	. 8
21	H-7-1	土師器坏	1 (12. 2)	4 3.3	粗・酸化	鈍い褐	底部は平底気味、体部は緩やかに内彎し口縁部で外傾する。	%残	
	<u> </u>						口縁部外面ナデ、体部ヘラ削り後ナデ、内面ナデ。	<u> </u>	6
22	H-7-2	鉄製品鎌	6 2.7	⑦ 0.3			現存長 11.3 ⑧ 55.72 身部全体がわずか彎曲する。刃先端		
		<u></u>					欠損。小型。	<u> </u>	8
23	H-8-1	須恵器蓋	①(16.6)	② 6.7	やや粗・選	灰	器高が低く天井部中央がやや凹むが、ほぼ平坦。体部は外傾	%残	
			4 2. 2		元		して開き端部に丸味を持つ。ロクロ整形、天井部回転糸切り		6
1					1		痕を残す。		
24	H-8-2	土錘	\$ 4.8	6 1.7	還元	灰	❸ 10.73 穿孔径 0.5	完形	8
25	H-811	土師器埦			普通・酸化			 	
							縁部に至る。口縁部外面横ナデ、体部指押さえ横位のヘラ削	34残	6
	1					1	り後ナデ、内面指押さえ後横ナデ。底部へう削り。	"	
Ь	L	<u> </u>			<u> </u>	L	ZMZZZ TEMBET CZEKIAZ Z O MARIZ ZZBIYO	l	L

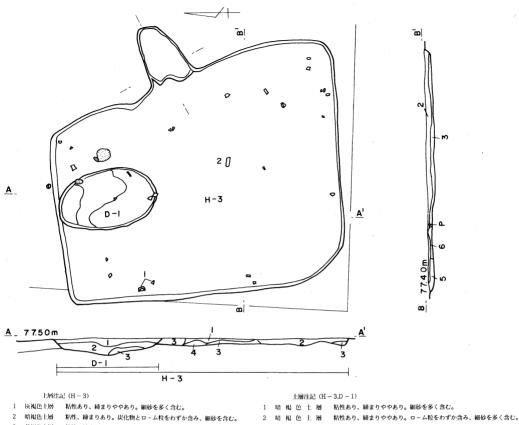
註:法量は①口径②底径③高台径④器高⑤長⑥幅⑦厚はcm、⑧重はgで表し、()は推定値を示す。

NO	出土場所	種類	法 量	胎土焼成	色調	器形・成形・整形の特徴	遺存備考	図版
26	H-9-1	土師器坏	①(12.0) ④ 3.5	粗・酸化	褐	底部は不安定な平底、体部は内彎気味に立ち上がり口縁部で		
,			·			わずか外傾する。底部はヘラ削り後ナデ、内面指押さえ、口	34残	6
						縁部内外面ナデ。		
27	H-9-2	土師器坏	① 12.0 ② 9.1	粗・酸化	鈍い褐	底部は不安定な平底、体部は内彎気味に立ち上がり口縁部で		
-			4 3. 7	1		わずか外傾する。底部から体部へラ削り後ナデ、口縁部内外	完形	6
						面ナデ、指圧痕残る。		
28	H-9-3	土師器坏	①(6.5)	粗・酸化	明赤褐	底部は平底、体部は緩やかに内彎し口縁部に至る。底部から	%残	
						体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ、底部指押さえ。		7
29	H-911	土師器坏	②(9.0)	粗・酸化	鈍い橙	底部は平底、体部は緩やかに内彎し口縁部上端で内傾する。	%残	
						体部内外面へラ削り後ナデ。		7
30	H-9 1 2	土師器甕	②(4.8)	普通・酸化	暗褐	底部は小径で平底、胴部は直線的に立ち上がり上位で膨らむ。	胴下位~	
						外面縦斜位のヘラ削り、内面ナデ。	底部残	7
31	H-15-1	羽釜	①(20.6)	普通・還元	褐灰	口縁部は内傾し口唇端部は平担で外面がやや突帯状になって	口縁部場	
						いる。鍔は上向き気味の断面三角形を呈す。内外面横ナデ。	残	7
32	H-15-2	土師質埦	① 11.7 ④ 4.7	粗・酸化	明褐灰	高台部は短く、体部は中位で内彎し口縁部で外反する。ロク	ほぼ完形	
			-		İ	ロ整形、内面ナデ、底部回転糸切り後付高台ナデ。		7
33	H-15-3	須恵器埦	①(14.6) ③(6.7)	粗・還元	灰	高台部は短く外反し、体部は丸みを持って立ち上がり口縁部	%残	
			4 6.0			で外反する。ロクロ整形、底部回転糸切り後付高台ナデ。		7
34	H-15-4	土師器坏	①(12.0) ④ 3.5	普通・酸化	鈍い橙	底部は平底、体部は緩やかに外傾し口縁部に至る。体部外面	½残	
						ナデ、底部ヘラ削り後ナデ。		7
35	H-15-5	石鏃	⑤ 2.9 ⑥ 1.5		明赤褐	⑦ 0.2 ⑧ 10.4 (石材)チャート (形状) 凹基無茎鏃	完形	8
36	H-15#1	土師器坏	①(12.2) ④(3.2)	粗・酸化	鈍い褐	底部は平底、体部は緩やかに外傾し口縁部に至る。体部外面	%残	
						ヘラ削り後ナデ、口縁部内外面ナデ。指圧痕残る。		7
37	P-19-1	石	⑤ 15.7 ⑥ 13.1			⑦ 5.2 ⑧ 1640 片面に使用痕跡を認む。自然礫。		8
38	P-27-1	石	⑤ 28.0 ⑥ 18.8			⑦ 6.1 ⑧ 5300 片面に使用痕跡を認む。楕円形。自然礫。		8





第 4 図 3号住居址竈実測図



粘性、締まりあり。ローム粒と細砂を含む。 3 黄褐色土層

4 黑褐色土層 粘性、締まりあり。わずか細砂を含む。(粘性が強い)

5 暗褐色土層 粘性、締まりあり。焼土粒とローム粒を含む。

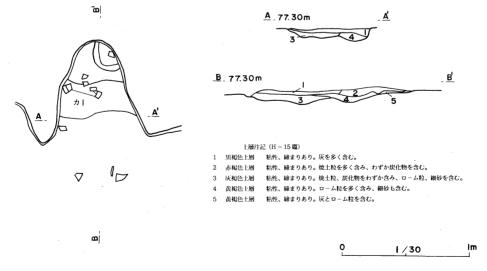
6 黄褐色土層 粘性ややあり、締まりあり。(砂質ローム)

- 3 にぶい黄褐色上層 粘性、締まりあり。ローム粒を多く含み、細砂を含む。

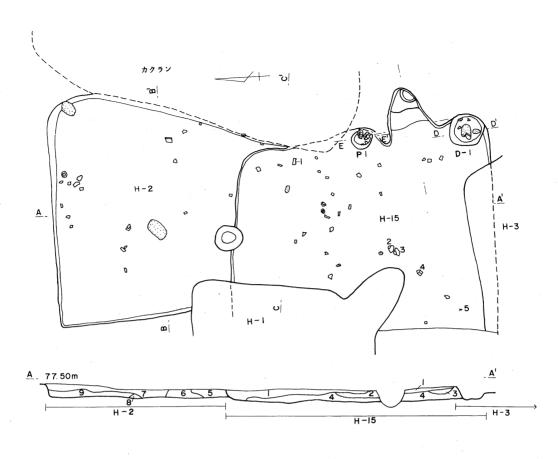
1/60 2m

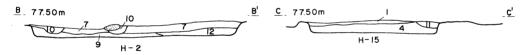
第 5 図

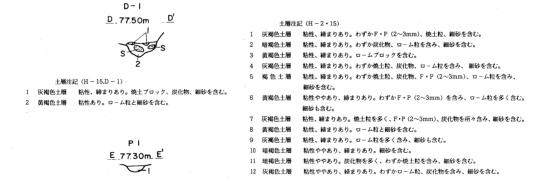
3号住居址実測図



第6図 15 号住居址竈実測図



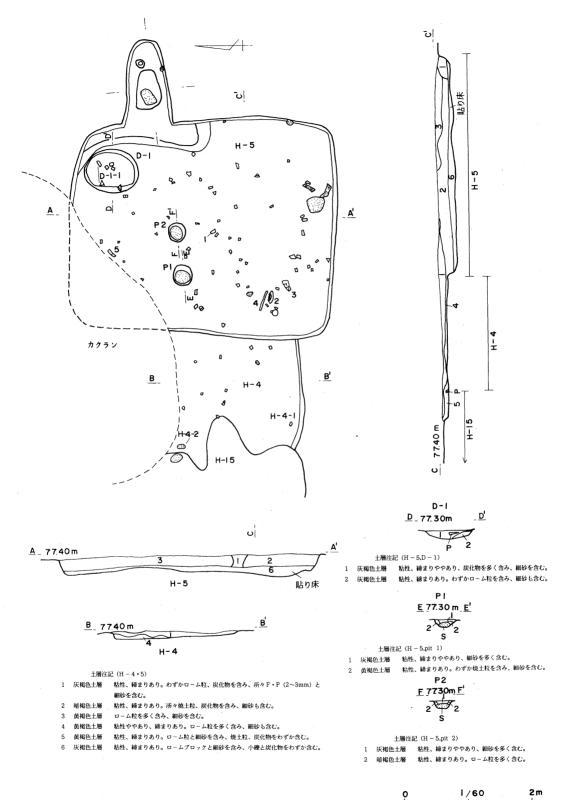




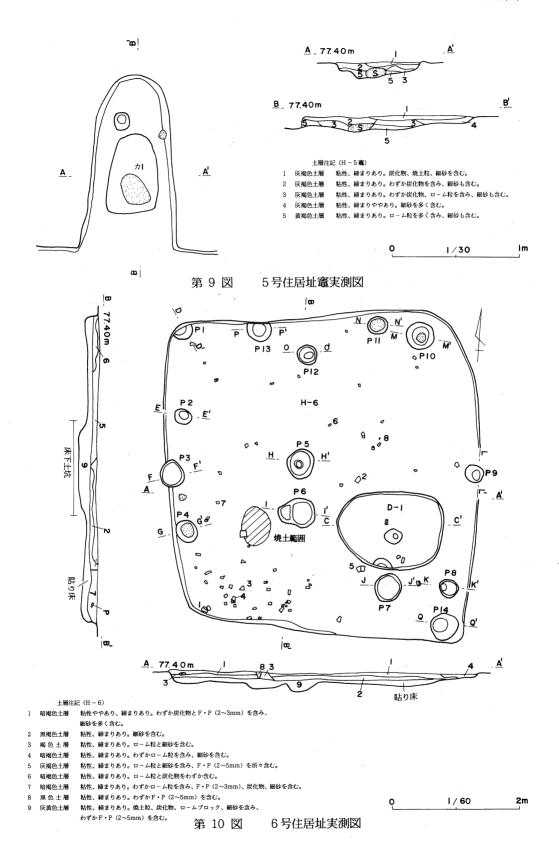
土層注記 (H - 15.pit 1)

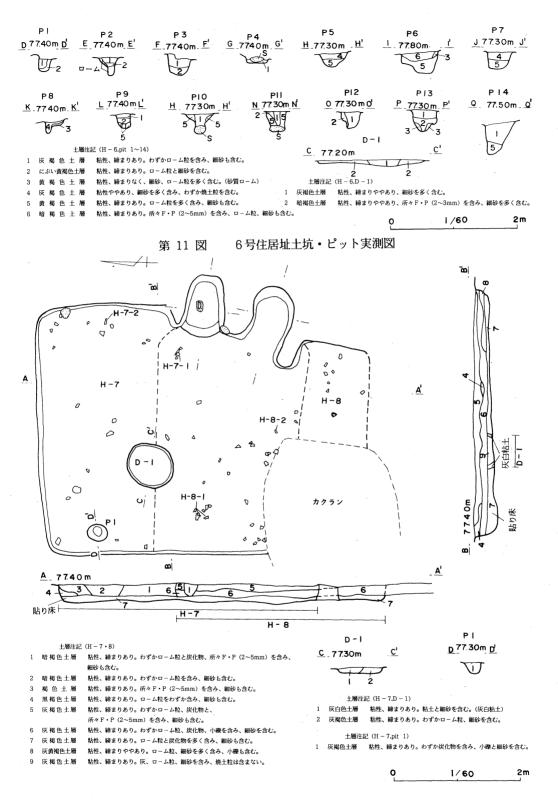
1 黄褐色土層 粘性、締まりあり。ローム粒、焼土粒、炭化物、細砂を含む。

0 1/60 2m

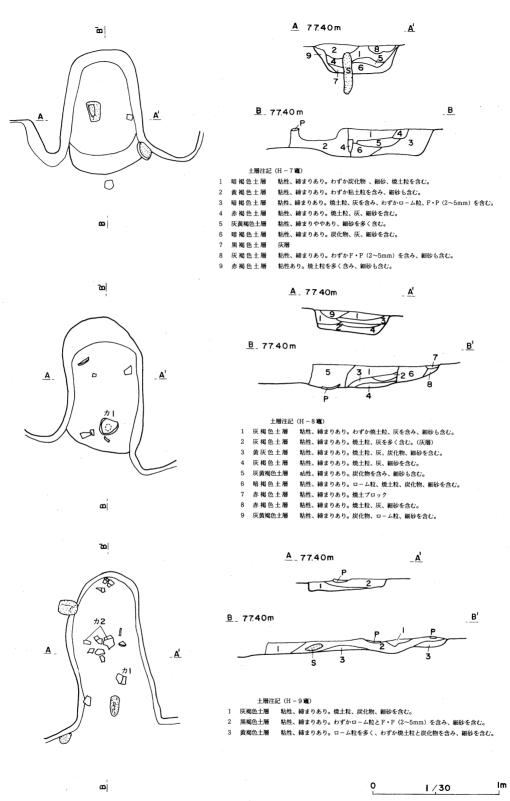


第8図 4号・5号住居址実測図

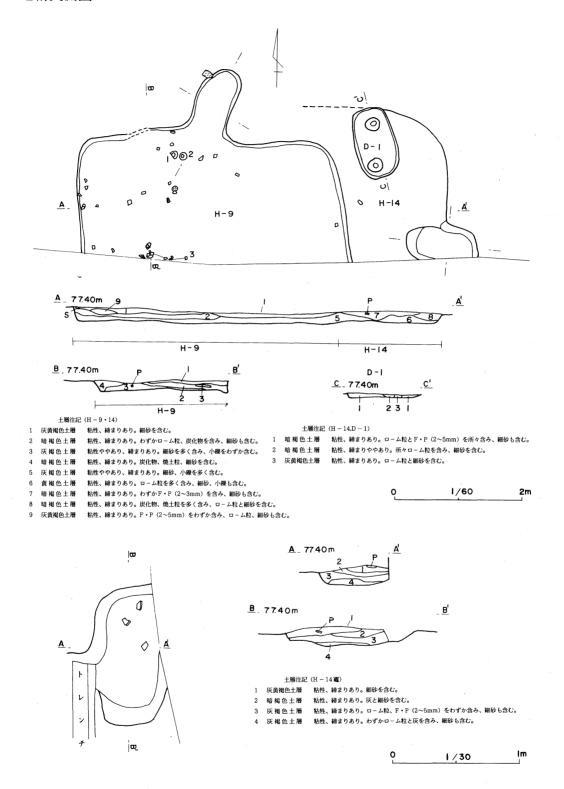




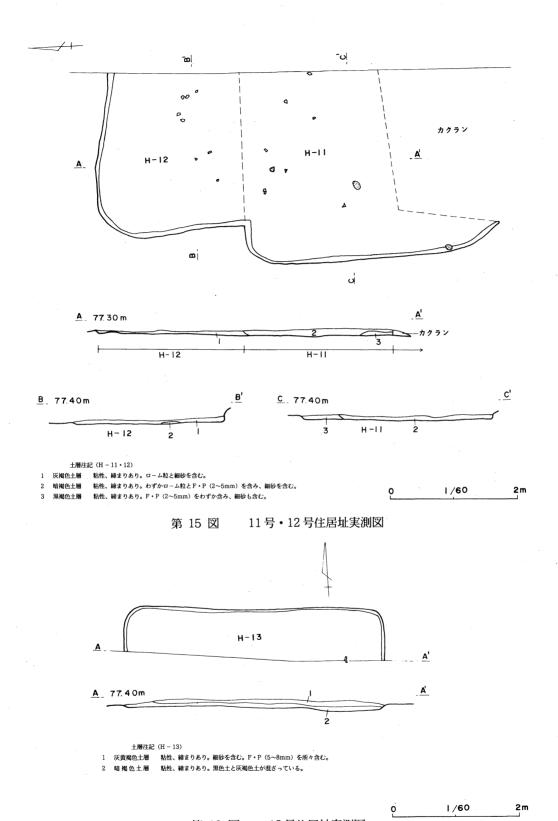
第 12 図 7号・8号住居址実測図



第 13 図 7号・8号・9号住居址竈実測図

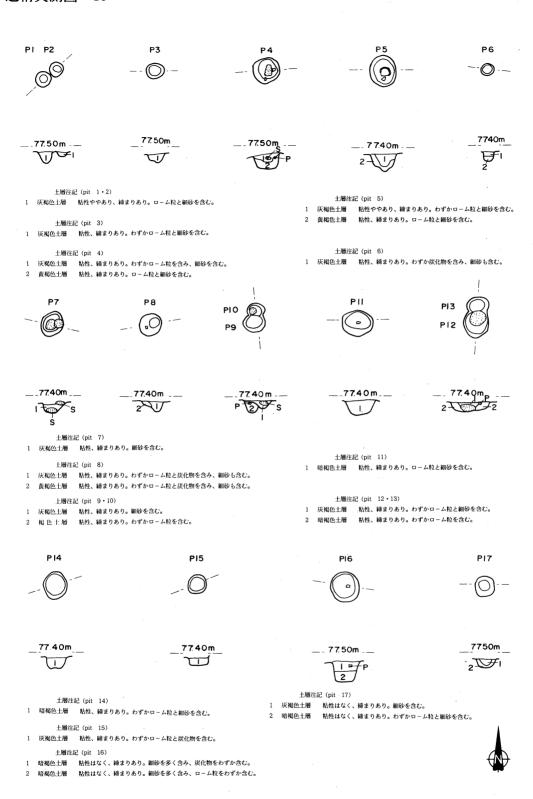


第 14 図 9号住居址・14号住居址・竈実測図



第 16 図 13号住居址実測図

遺構実測図 10



2m

1/60

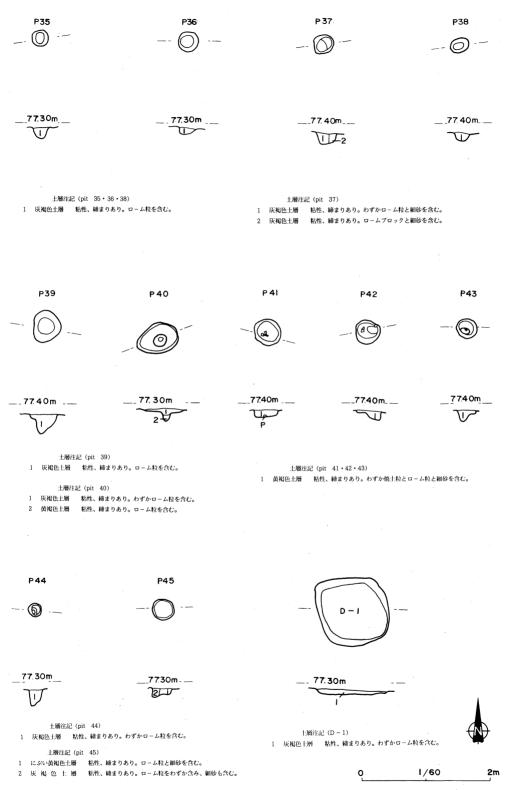
P24 P25 P23 Р18 PI9 P20 P21 P22 77.40m 77.50m 7740m 77.40m 77.40m SZI 1/2/ 土層注記 (pit 18) 土層注記 (pit 22·23) 1 灰褐色土層 粘性、締まりあり。わずかローム粒と細砂を含む。 1 灰褐色土層 粘性、締まりあり。わずかローム粒と炭化物、細砂を含む。 土層注記 (pit 24・25) 土層注記 (pit 19・20・21) 1 灰褐色土層 粘性、締まりあり。ローム粒と細砂を含む。 1 灰褐色土層 粘性、締まりあり。ローム粒と細砂を含む。 2 灰褐色土層 粘性、締まりあり。細砂を含む。 3 暗褐色土層 粘性、締まりあり。ローム粒を含む。 2 黄褐色土層 粘性、締まりあり。ローム粒を含む。 P28 P29 P26 P27 77.40m 77.40 m 土層注記 (pit 26) 土曆注記 (pit 28) 1 灰褐色土層 粘性、締まりあり。わずかローム粒と細砂を含む。 1 灰褐色土層 粘性、締まりあり。わずか細砂を含む。 土層注記 (pit 29) 土層注記 (pit 27) 1 灰褐色土層 粘性、締まりあり。ローム粒と細砂を含む。 2 黄褐色土層 粘性、締まりあり。ローム粒と細砂を含む。 3 暗褐色土層 粘性、締まりあり。ローム粒と名む。 1 灰褐色土層 粘性、締まりあり。わずかローム粒を含む。 P33 P34 P32 P30 P31 77.30m 77.30m 77.40m 77.30m \$ 3 土層注記 (pit 30) 土層注記 (pit 32) 1 灰褐色土層 粘性、締まりあり。わずかローム粒と炭化物を含む。 1 黄褐色土層 粘性、締まりあり。ローム粒を含む。 土曆注記 (pit 33・34) 1 灰褐色土圏 粘性、締まりあり。ローム粒を含む。 土層注記 (pit 31) 2 ロームブロック 1 灰褐色土層 粘性、締まりあり。わずかローム粒を含む。

3 黄褐色土層 粘性、締まりあり。ロームブロックを含む。

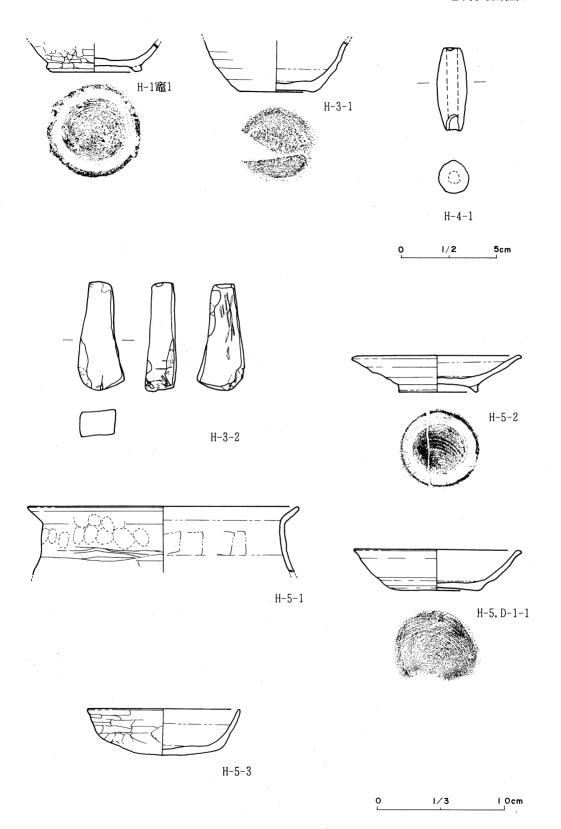
2m

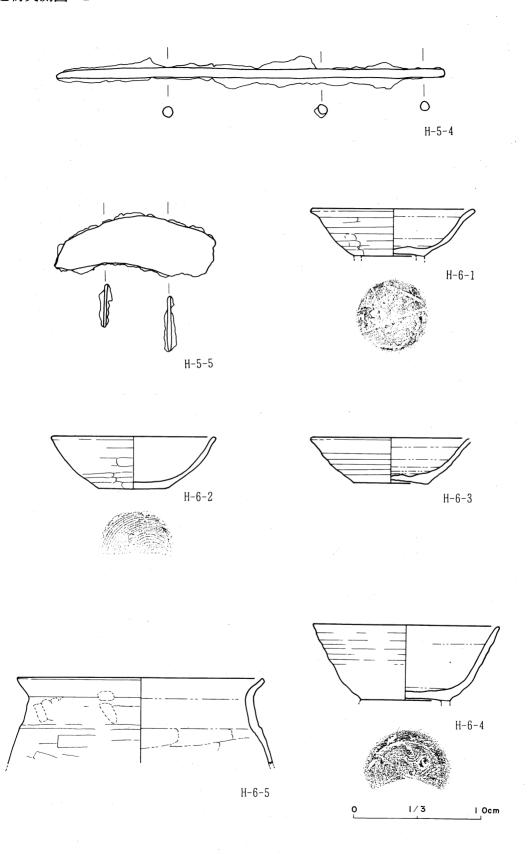
1/60

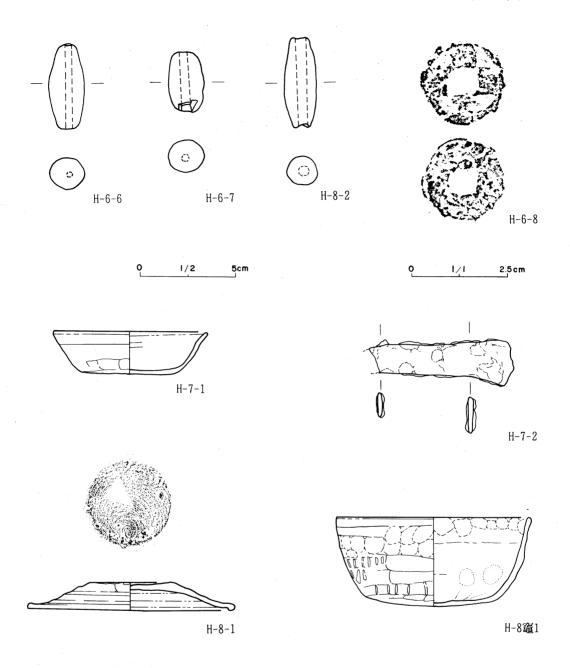
遺構実測図 12

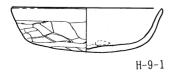


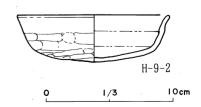
遺物実測図 1



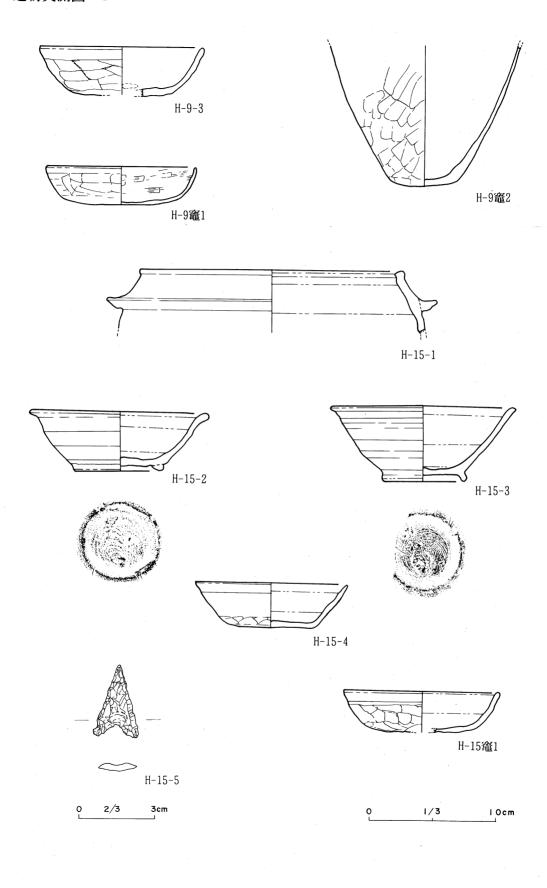


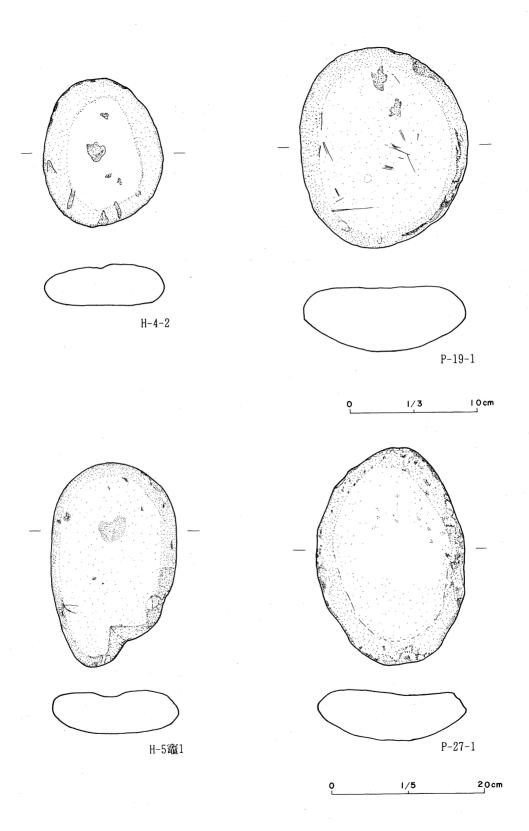






遺物実測図 4







調査前現況(北東より望む)



調査前現況(南東より望む)



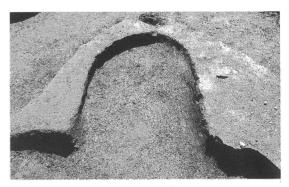
調査区西側



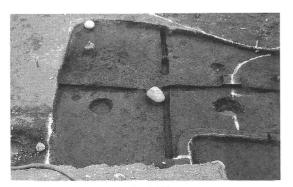
調査区東側



1号住居址



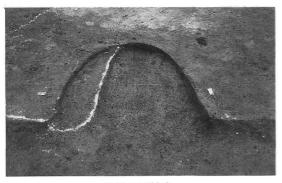
1号住居址竈



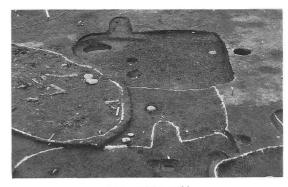
2号住居址



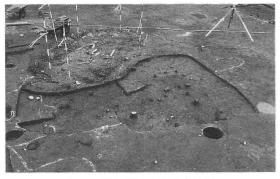
3号住居址



3号住居址竈



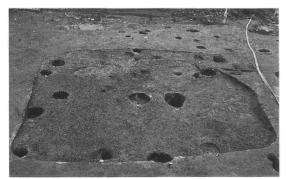
4号•5号住居址



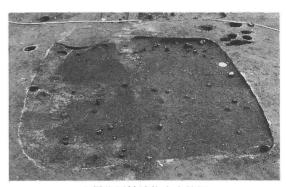
4号•5号住居址遺物出土状況



5号住居址竈



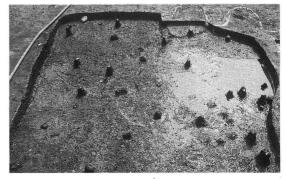
6号住居址



6号住居址遺物出土状況



7号・8号住居址



7号•8号住居址遺物出土状況

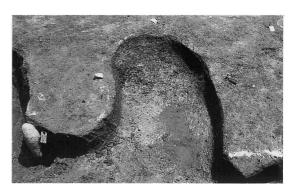
8号住居址竈出土遺物



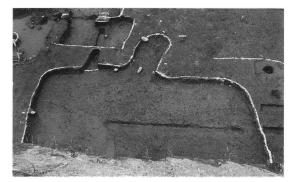
9号住居址遺物出土状況



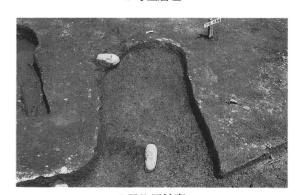
11号·12号住居址



8号住居址竈



9号住居址

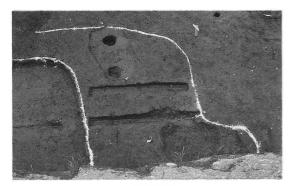


9号住居址竈



13号住居址

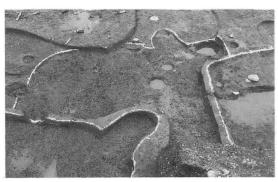
図版 4



14号住居址



14号住居址竈



15号住居址



15号住居址竈



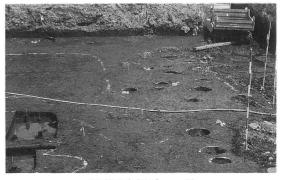
15号住居址遺物出土状況



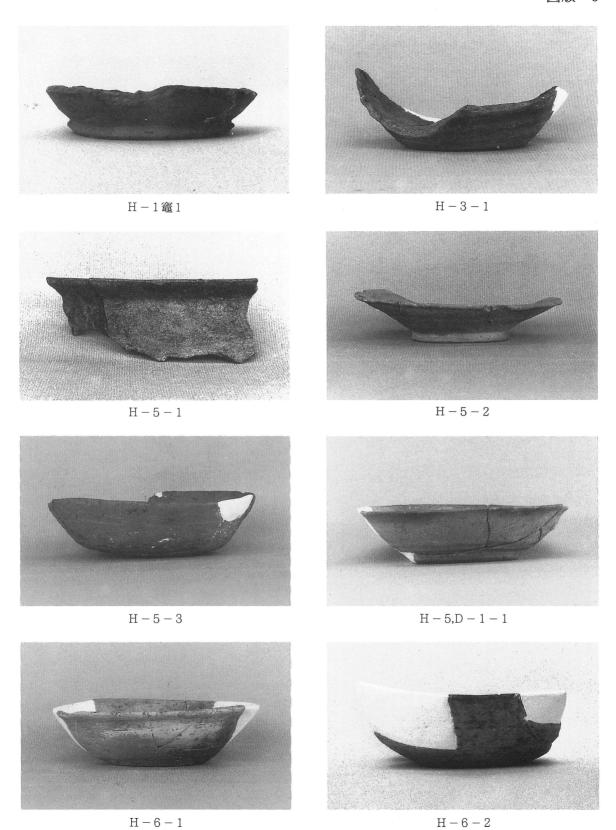
調査区西側ピット群

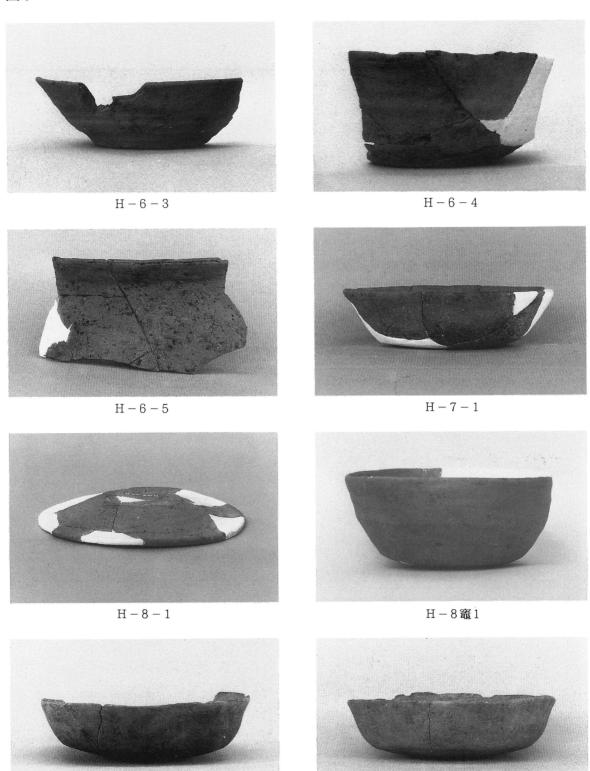


調査区中央ピット群



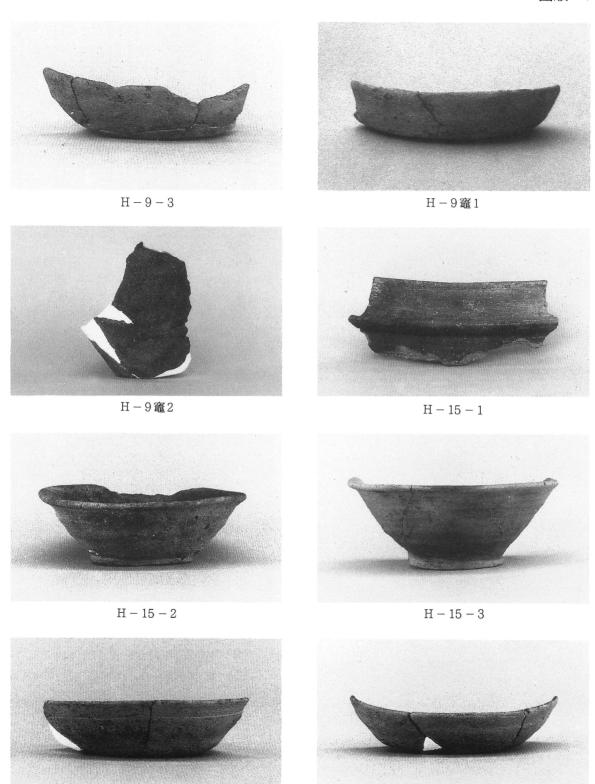
調査区東側ピット群





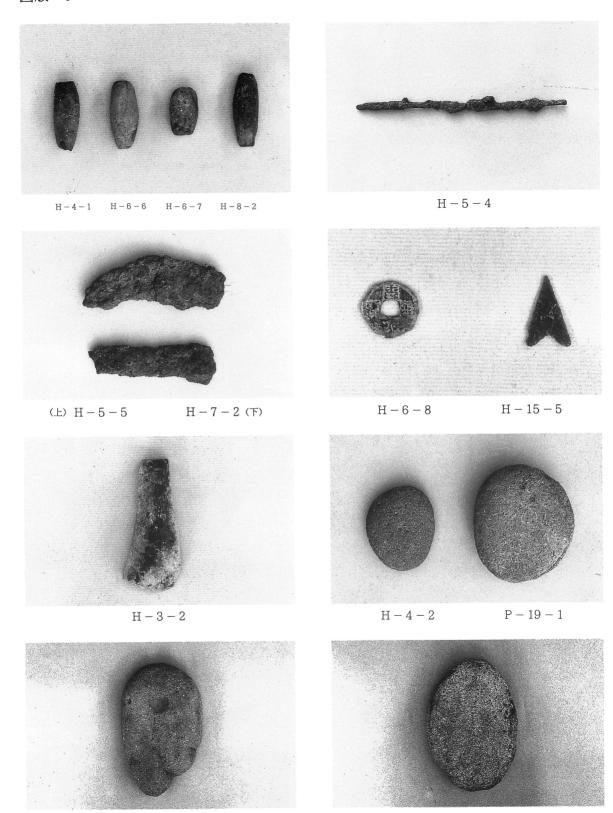
H - 9 - 1

H - 9 - 2



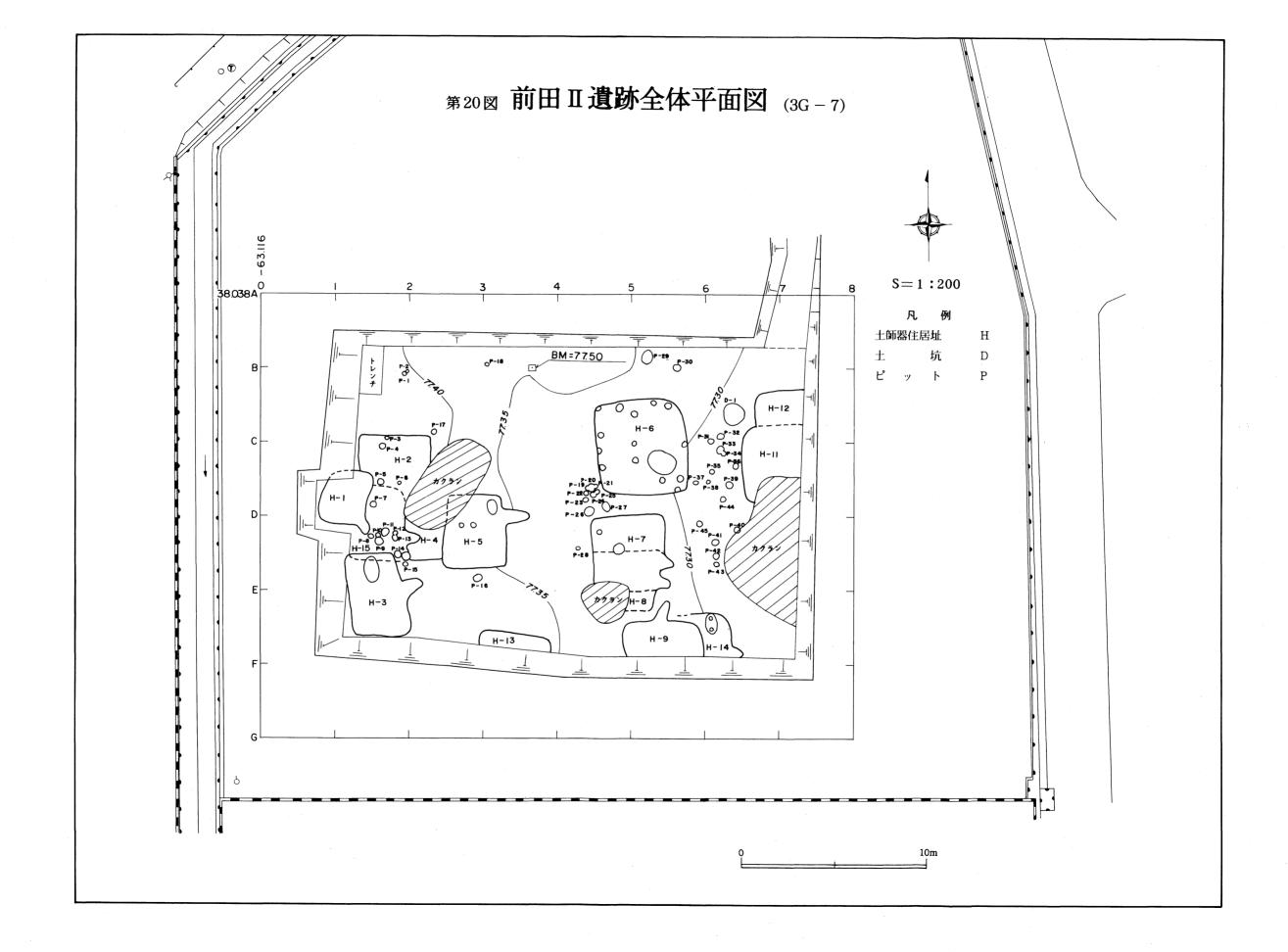
H-15竈1

H - 15 - 4



H-5竈1

P - 27 - 1



エヌ・ティ・ティ中央移動通信群馬支店社屋 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

前田Ⅱ遺跡

平 成 3 年 12 月 5日 印刷 平 成 3 年 12 月 10日 発行

発行者 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 前橋市上泉町 664 番地の 4

編 集 スナガ環境測設株式会社 前橋市青柳町211番地の1

印刷 有限会社サクラヤ印刷所 前橋市石倉町一丁目5番7号



